

## 平和祈念展示資料の記録・保存等に関する検討会（第3回）

平成20年7月7日

【亀井座長】 本日はお忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。平和祈念展示資料の記録・保存等に関する検討会第3回の会合を開催させていただきたいと存じます。

それでは、お手元の議事次第に従いまして、議事を進めさせていただきたいと思います。

本日は、内外の関連資料館の状況につきまして、昭和館、しょうけい館、舞鶴引揚記念館、姫路市平和資料館、浦頭引揚記念資料館からお話をお伺いするとともに、事務局からも内外の関連資料館についての御説明をいただくことになっております。関連資料館の皆様には、本日は本検討会の審議のために、御多忙の中、また遠路、足をお運びいただきまして、誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

それでは、計5館の資料館からそれぞれ御報告をいただきたいと思います。

まず初めに、昭和館につきまして、小林事務局長から御説明をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいいたします。

【昭和館小林事務局長】 昭和館の事業説明をさせていただきます。今日お手元に事務局から配布されています資料4「内外の関連資料館について」ということで、その2ページに昭和館がありますので、これをもって御説明いたします。

事務局が配付しております「内外の関連資料館について」と、それと私どもから今日資料としてお配りしたのは、パンフレット「昭和館」ということでワンセットありますので、それを見ながらお聞きください。

まず、資料4の2ページの最初の欄に、(資料館名)昭和館、(設置者)厚生労働省、(所在地)千代田区、(設立年月)平成11年3月と書いてあります。もう既に現場をご覧になった方がおられると思います。重複することもあるかと思いますが、簡単に御説明いたします。

ここにありますように、設置目的は、厚生労働省が所管しています戦没者遺族に対する援護施策の一環として、戦没者遺族をはじめとする国民が経験した戦中・戦後の国民生活上の労苦を後世代にお伝えするというところで、情報収集、あるいは資料を展示しています。主な展示資料ということで、「母と子の戦中・戦後」をメインテーマとして、展示事業を行

っています。

配付しました一番大きなパンフレット「昭和館」をご覧いただきたいと思いますが、九段下の九段会館のわきにあります施設です。7階建てでして、7階、6階が常設展示室、5階が映像・音響室、4階が図書室ということで、ここにありますように、設置目的ですが、大きく分けまして、3つの柱立てで事業を行っています。今、御説明申し上げましたとおり、7階、6階が「母と子の戦中・戦後」をテーマとした常設展示となっています。

日華事変勃発前の昭和10年ごろから戦中として昭和20年まで、戦後を昭和30年代の冒頭、いわゆる経済白書で「もはや戦後ではない」とうたわれましたこの時期まで期間として展示しております。

展示内容については、大きな資料のパンフレット1ページ、7階では、いわゆるメインテーマにありますように、「家族の別れ」から始まります。「家族の別れ」、「家族への思い」等々で展示しています。6階では、いわゆる「戦後」ということで、戦後の復興、残された家族の復興に向けての努力の姿をお伝えするというで展示しています。

5階の映像・音響室というのがあります。先ほど申し上げましたとおり、図書、映像等の資料閲覧事業というのが一つの大きな柱でして、映像といいますと、当時のニュース映画ですとか、記録映画、あるいは写真等々をデジタル化しまして、端末で見ていただくというものです。また、音響としては、SPレコードを、前沢コレクションといいたまうか、相当数のものをデジタルでお聴きいただけるということです。

もう一本の柱立てですが、4階が図書室ということで、ここでは戦中・戦後の国民生活を中心とした文献資料をそろえていまして、大きく分けますと、国民生活上のもの、あるいは戦争に関する基本的なもの、あるいは独自資料のものということで、3本柱で収集しています。

今日の当検討会からの御質問に沿って御説明いたしますが、今まで申し上げましたところは設置目的及び事業の概要ということで触れました。

次に、収蔵資料数と展示資料数、あるいは資料の収集方法というお尋ねです。収集資料については、先ほど申し上げましたとおり、実物資料、映像資料、図書資料等で、大きく分けると、3分野にわたります。そのうちの展示に使います実物資料の現在収蔵していますのは、総計で約3万3,000点ほど収集しています。この収集方法の内訳ですが、おおむね寄贈資料が約2万3,000点、購入資料が約7,000点ということでして、実物資料の約70%が御遺族をはじめ、国民の皆様方から寄せられた寄贈資料です。18年度

で約2,000点、19年度で約3,000点を収集しています。

実物資料の分類ですが、パンフレットの中にありますように、ここに展示されているものすべてが収集したものです。先ほど申し上げましたように、「家族の別れ」ですが、日章旗や千人針、あるいは学童ですと当時の学童疎開で使われていた、あるいは家族でやりとりしたはがき・手紙類、あるいは当時の代用品等々を収集しています。ただ、この昭和館は国民生活上の労苦を後世代に継承、お伝えするということですので、戦争に関する基本的な、いわゆる兵器というようなものは一切収集していません。そこが特徴でございます。

次に5階の図書室で使っております図書資料、現在、約10万1,000冊収集しています。これは大きく分けまして、国民生活図書が約4万1,000冊、約40%です。それに戦争に関する基本図書ということで15%ほど収集しています。あと独自資料としては約3万6,000冊あります。一番大きいのは、ここに戸高先生がいらっしゃいますけれども、史料調査会の海軍文庫からお預かりした図書、あるいは厚生労働省からお預かりしている図書があります。また一方、中央公論新社からお預かりしている図書もありますが、そのようなもので、館としての独自資料として約35%ほど持っています。

国民生活関係の図書がどういうものかということ、当時刊行された雑誌、あるいは漫画類等々があります。いわゆる生活体験記も含まれています。戦争に関する基本図書とは、新しいものとしては戦争関係の関連、部隊史ですとか、あるいは戦争体験記等々集めています。

次に、映像・音響資料ですが、約4万5,000件ほど収集しています。これは静止画、いわゆる写真が約3万7,000点、ニュース映画等のフィルムが動画資料として約2,600作品、レコードとしては、今整理していますが、約6,000枚あります。総計しますと相当数の収集資料となります。

先ほど申し上げましたとおり、収集方法としては、多くは寄贈していただく、あるいは寄託していただく、あるいは当方としては、実物資料で紙物、いわゆるパンフレットですとか、ポスター類は購入しています。多くの資料は寄贈していただいている資料でございます。

御質問は、展示以外の事業は何をやっているかということですが、先ほど申し上げたとおり、昭和館は大きく分けまして、3つの柱立てで運営しているということです。

運営上の工夫という御質問ですが、これについては、厚生労働省から委託されている事業ですので、より多くの方々に来ていただきたいということで、広報活動は十分注意して、

地下鉄のポスターですとか、広告塔、あるいは各小中学校に「学校だより」を送付したりしています。特に、来館者数が非常に少ない高校生に向けても「高校生だより」を発行したり、各高校に資料を送付して、修学旅行、あるいは総合的学習の中で来ていただく工夫をしております。

展示の中の工夫ということですが、展示物を展示するのみならず、現在、小中学生の皆さんに、当時の国民生活の労苦をよりよく理解していただくために「体験ひろば」として、触れていただく、着ていただく、調べてもらうという3つのテーマで、実際に当時の鉄かぶとでしたり、国民服を着ていただく、あるいはクイズ方式で、当時の道具を「これ、なに？」というような形で理解していただくために何点か並べています。そのほかに、パソコンでいろいろ体験していただくということで、一つの大きなものとして、パソコン上で防空体験をしていただくシステムを構築しています。

それと、学校で教鞭をとられた先生方に来ていただきまして、説明員をしていただく、あるいは土日にはボランティアとして、常設展示場で子供さんのお相手をしていただくということを行っております。

特に館の運営上の工夫ということではありませんが、特徴としては、情報システムを完備しています。いわゆる図書資料室すべて、一番の特徴としては、「戦史叢書」及び「旧陸海軍部隊略歴」がすべてデジタル化されていまして、1つの言葉なり用語を入れればすべてわかるようになっております。なぜかと申し上げますと、館が遺族の皆様方に父、あるいは祖父母の戦跡を調べていただく、あるいは巡拝に行った際の資料にさせていただくということで整備しています。また、一般の方、研究者のためには、当時の中央公論ですとか、文藝春秋等もすべてデジタル化されていまして、何か用語なり、単語を1つ入力すれば、検索が可能だということが大きな特徴かと思えます。

**【亀井座長】**      ありがとうございました。

それでは、引き続きまして、しょうけい館については、石田事務局長から御報告をいただきたいと思えます。

**【しょうけい館石田事務局長】**      既にお配りしてありますパンフレットをご覧くださいまして、これに沿って御説明したいと思います。

まず、設置目的ですが、戦争で傷つき、病に伏した戦傷病者とその家族等が戦中・戦後に体験した様々な労苦についての証言・歴史的資料・書籍・情報を収集、保存、展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供するために設置された国立の施設です。今、御

説明がありました昭和館と同じように、厚生労働省が設置した施設でして、平成18年3月に開館し、運営は財団法人日本傷痍軍人会があたっているということで、まだ開館して2年余りです。先発の資料館、博物館から比べれば、新しい施設です。

次に、館の事業概要ですが、3つの事業と1つの活動から成り立っています。1つは、実物資料の収集、企画展を含む展示事業、これが大きな事業の柱の一つです。2つ目は、図書、映像資料の収集、閲覧事業です。それから、関連資料、図書の内容についての関連情報提供事業、これが3つ目です。最後に広報活動であり、この3つの事業と1つの活動から成り立っています。

ちなみに、館名ですが、「しょうけい館」ということで、あわせて「戦傷病者史料館」という名称も付して使っているところです。受け継ぎ、語り継ぐという意味の「承継」の言葉がありますが、皆さんに親しんでいただくように、承継の部分を平仮名表記をしていますが、あわせて館の性格を示すものとして、「戦傷病者史料館」という名称も付記して使っています。

次に、展示内容ですが、2階と1階、合わせて約700平方メートルということで、国立の施設としては、多少こじんまりした施設ですが、ここで展示事業等を展開しています。

まず、2階です。ここが常設展示室になっていて、体験者の証言をもとに、戦場で負傷したある兵士の足跡をたどる形で戦傷病者とその家族の労苦をお伝えするというところで、7つのゾーンに分けて、それぞれ展開しています。ちなみに、1つ目のゾーンは戦争とその時代。ここでは軍人と徴兵制、入営、出征というところまで扱っています。2つ目が戦場での受傷病と治療。3つ目が野戦病院ジオラマ。4つ目が本国への送還。5つ目が帰還後の労苦。6つ目が戦後の労苦。特にGHQの占領政策のもとで、一部の重傷者を除いて恩給が全面的にストップされるということで、戦傷病者の生活は経済的にも困難を強いられ、また、肉体的にも障害を得て、なかなか思うような職につけないということで、極めて厳しい状況に追い込まれているわけですが、そういう戦後直後の占領時代の戦傷病者とその家族の労苦、それから戦後復興、経済成長と暮らしの変化というものを、いわゆる戦後の様々な労苦について展示をしているというところです。

最後は、箱根療養所、これは脊椎損傷の唯一の医療機関です。今でもありますが、ここは御家族で生活ができる場所として、そういう療養所の中での生活をご覧いただいて、家族の支えというものを特に前面に出しながら、戦傷病者とその御家族の労苦をお伝えしていくというシナリオになっています。

1階ですが、体験者が語る映像やメッセージ、作品により、戦傷病者とその家族の様々な労苦をお伝えするという事で、「戦傷病者と援護のあゆみ」、それから証言映像シアター、ここは戦傷病者が語るさまざまな体験を映像でお伝えしているところです。平和へのメッセージ、作品に込めた労苦、それから常設企画展示として、「水木しげる氏の人生」ということで展示をしています。

資料展示の基本的な考え方ですが、昭和館と同じように国立の施設です。特に各事業の運営については、公正・中立を確保していくということで慎重に対応してまいりまして、特に2階の常設展示については、戦傷病者の発生原因として、どうしても戦争を扱わざるを得ないということになります。これらについても、一つの特定の歴史認識なり、戦争評価を提示するというのではなくて、時代背景として、極めて中立的な形で時々の時代背景を扱っているということで、今のところ厳しい御意見はいただいていないというのが現状です。

所蔵資料数、展示資料数ですが、実物資料、これは写真等も含めての件数ですが、約4,500点、そのうち展示が約300点です。図書文献資料については約5,700冊、そのうち整備が済んで、いわゆる閲覧に供している図書数が約3,000冊ということです。

資料の収集方法ですが、私どもは財団法人日本遺族会及び妻の会という組織がありまして、そういう組織に対して具体的なアイテムを明示しながら、寄贈等をお願いしています。あわせて企画展なり、企画上映会の機会を通じて、来館者の方々にこういう資料を収集しているということをお知らせする中で、資料の寄贈・寄託等のお願いもしています。そういう中で、どうしても必要な資料であり、当館が保有できていない資料については、購入していくということで対応しています。

展示以外の事業です。1つは、先ほどお話しした2つ目の柱ですが、図書の収集、閲覧事業として、私たちの基本的な図書の収集対象は、特に戦傷病者、あるいは戦傷病者の家族が記した体験記などを中心に収集してまいりまして、あとは医療や援護関係の図書文献ということで事業の展開をしているところです。この図書収集・閲覧事業の一環として、例えば研究者だとか、学生に対するレファレンスも最近は充実してきて、具体的に対応しているという現状です。

パンフレットを見ていただきたいと思いますが、右側のほうに図書閲覧室ということで写真が載っていますが、ここが1階の図書室として、事業でいいますと、図書収集、閲覧事業を展開しているところです。

それから、2つ目が映像資料の収集・閲覧事業ということですが、私どもは証言映像、通称オーラルヒストリーと言っておりますが、戦傷病者とその家族から戦中・戦後の壮絶な実体験、戦後の様々な労苦について御証言をいただき、それを映像に収録して、皆さんに見ていただくという事業を展開してまして、今、約70本の証言映像を収録しています。特に証言映像については好評いただいております、戦中・戦後の戦傷病者とその家族の労苦がよく伝わってくる、映像になっても非常に重く心に響いてくるということの感想をいただいております、証言映像シアターで毎月上映プログラムを作成して、皆さんにお見せしているところです。

それから、広報活動とか、関連関係機関との連携ということで、昭和館も入っているのですが、千代田区ミュージアム連絡会がありまして、約19の博物館、美術館、資料館等が参加して情報交換なり、各事業についての連携ができないかどうか模索する連絡会があります。そのようなところとの連携も模索しているところです。

運営上の工夫ですが、展示説明員の配置についてはしていません。団体なり個人が説明をしてほしいという御要請があれば、直ちに学芸員が対応するという体制が整っております、対応させていただいております。あわせて、パンフレット、音声ガイドについては、日本語、英語の2種類の音声ガイドを用意してまして、適宜、対応させていただいております。

もう一つは、総合受付案内というのがいわゆる館の顔になってまして、色々な資料を保存して展示していても、館の受付の対応が悪いと、「ああ何だ」というある意味では誤った評価をされかねないということがあります。したがって、私どもは学芸員の対応も含めての話ですが、受付については、懇切・的確・迅速に対応できるように日々訓練を重ねています。

来館者を増やすための取組ですが、やはり常設展のほかに様々な労苦をより多くの方にお伝えしたいということがあります。したがって、これまでも定期的に企画展なり、企画上映会を開催しています。それから、それにあわせて、広報活動として、全国規模の学校、図書館等々にパンフレット、ポスターをお配りして、しょうけい館ここにありということと存在を周知・認知していただくということと、しょうけい館はこういう企画展をやっていますということで、皆さんがしょうけい館に熱いまなざしを向けていただく努力をしているところです。

あと日本遺族会や日本傷痍軍人会の機関紙があります。それから千代田区で言えば千代

田区報などへの投稿という形で広報活動をしています。もう一つ、日常的な広報活動として、ホームページが非常に大きな存在意義があります。私ども何回かデザインを変えて、機能面でも充実を図っています。最新の情報をまず1画面ですぐお伝えできるような画面構成の変更をするなどして、工夫を凝らしています。

それから、若い世代に訴えかけるための取組ということで、まだ開館して2年余で、なかなかそこまで個別具体的に展開し切れているわけではないのですが、例えば、最近でき上がった館の紹介ビデオ、DVDを小学校、中学校、高校、大学に送って、それを通じての呼びかけと、それから先ほどお話しした証言映像、これは団体に無料でお貸していますが、いわゆる学習教材として使っていただくということで、そのようなことを通して、若い人たちに戦傷病者の労苦、その思いを理解していただくということで、微力ながら努力をしているというのが現状です。

**【亀井座長】**      ありがとうございました。

それでは、引き続きまして、舞鶴引揚記念館について、宮本館長とNPO法人の舞鶴・引揚語りの会の中田副理事長兼事務局長から御説明をいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

**【舞鶴引揚記念館宮本館長】**      まず、設置目的ですが、舞鶴港は昭和20年から昭和33年までの13年もの長きにわたり、主に旧ソ連、中国等の海外から66万余人の引揚者と1万6,000余柱の遺骨を迎え入れたところです。特に昭和25年以降は国内唯一の引揚港となり、「引き揚げのまち・舞鶴」として大きな歴史的使命を果たしました。その間、舞鶴市では、全市民挙げての歓迎、婦人会による引揚援護局への慰問、ふかし芋や湯茶の振る舞い等、数多くの事業を行いました。

その目的ですが、引揚事業を後世に伝えるため、舞鶴市では、昭和44年10月に引揚者の上陸地を見下ろせる丘に引揚記念公園を建設しました。この公園には引揚者有志による永遠の平和を願った碑「ああ母なる国の碑」など、引揚げにまつわる記念碑が建立されているところです。昭和63年4月には、全国の引揚者等からの寄附と関係者の機運の高まりを受け、この公園内に最後まで引揚げの使命を果たしました足跡と、再び繰り返してはならない戦争の悲劇、悲惨な抑留と引揚げの史実を後世に伝える平和のシンボルとしまして、永遠の平和の願いを込め、舞鶴引揚記念館が建設されたところです。

次に、館の事業概要ですが、現在、舞鶴引揚記念館には多種多様な苦難を物語る貴重な資料を収集、展示、保存していますが、その一つ一つには喜びや悲しみの思いが込められ

ており、訪れた方々の心を打ち、戦争、そして引揚げの余韻の中で涙を誘っているところです。これらの資料に込められた記憶をいかにして来館者に伝えていけばいいのかということテーマに、語り部による口頭伝承も一つの展示方法として、展示資料に込められたメッセージを的確に伝えておるところです。展示は常設展示コーナーと企画展示コーナーを設けていまして、常設展示コーナーの常設展示1では、苦境の記憶としまして、昭和初期の激動期から満州開拓、終戦による武装解除、そして、シベリア強制抑留生活を展示しています。

次に、常設展示2では、帰還そして再会ということで、引揚援護局での帰国手続、再会の様子などを、また、ここには「岸壁の母」、「岸壁の妻」のコーナーも特別に設けているところです。

次に、常設展示3では、平和の祈りとしまして、引揚げに功績を残された方々を展示しているところです。

次に、企画展示では、常設展示の重要な部分を掘り下げて展示することに利用したり、常設展示の総体的な弱点を補っています。現在、本年4月からはシベリア抑留画家であります佐藤清氏の絵画30点を展示しまして、苦しかった抑留生活の様子が如実に描かれており、戦争の悲惨さを訴えているところです。

また、当館には、今申しあげました画家をはじめ、香月泰男氏ほか多くの方々から寄贈いただいた絵画が1,049点ありまして、絵画専用の収蔵庫に保管しています。このほか、引揚者であります漫画家の赤塚不二夫氏、ちばてつや氏、森田拳次氏など9名が抑留時代を描かれた原画53点も寄贈・寄託していただきまして、大切に保管するとともに、企画展示等に活用させていただいています。

これら絵画をはじめ、当館で所蔵しています資料は、開館以来、すべて引揚者及び御遺族から寄せられた寄贈品をはじめ、京都府、旧厚生省、報道機関、さらには市民の方々の提供によるものです。開館当初は4,723点であった資料も、毎年多くの方々から御寄贈いただき、昨年度も55人の方から84点御寄贈いただきましたが、現在では、衣類310点、生活用品540点、写真1,032点等々、1万1,209点を所蔵していまして、そのうち特に抑留生活、引揚げ等を訴える資料約900点を現在展示しています。

また、館内において語り部活動を実践しておりますNPO法人舞鶴・引揚語りの会では、体験者からの体験談を募集し、関係者や体験者等からの話をDVD化しているところです。

次に、展示以外の事業ですが、舞鶴引揚記念館に所蔵されている資料のうち、現在、当

館には3,775冊の書籍を所蔵しています。貴重な書籍以外は常時展示し、貸出しを行っています。抑留、引揚げの調査研究については、NPO法人舞鶴・引揚げの会の力を借りながら、現在、少しずつですが、作業を進めているところです。今後は更に本格的に調査研究を行っていかねばならないと強く感じています。

次に、運営上の工夫ですが、開館当初から抑留や引揚げを経験した人たちが、シベリア抑留や引揚げの歴史について来館者に語ってきていただきました。しかし、これらの方々も高齢化で活動が困難になってきたことから、舞鶴市教育委員会では、平成16年度から「語り部養成講座」を開講し、後継者を育成しているところです。現在43名の方が修了され、展示説明員として毎日お世話になっているところです。

なお、この方々は、平成18年10月にNPO法人舞鶴・引揚げの会として認可を受けられまして、来館者に対する案内や展示資料等の説明を精力的に取り組んでいただいているところです。

次に、ICTの活用ですが、抑留、引揚げに係る多様な情報の発信と、それを享受していただくことは、当館にとって大きな使命であることから、ホームページを平成14年に開設したところです。今後は、所蔵資料をデータベース化し、所蔵資料の目録の公開、さらには引揚者からの証言を記録し、発信していくことが舞鶴引揚記念館に与えられた使命であると強く思っているところです。

また、来館者を増やすための取組ですが、舞鶴引揚記念館には毎年約12万人の方が来館になります。北は北海道、南は九州から訪れていただいています。来館者のうち、アンケート調査の結果を見ますと、引揚者、そして家族の方々が半数を占めているのが現状です。この方々も御高齢になられ、今後の来館も見込むことは残念なことに少なくなると思っているところです。

そういう状況から、引揚記念公園には戦友会等102団体が八重桜を植樹されています。これらは故国に第一歩を記した上陸地に、異郷の地に倒れ、帰らざる人となった幾多の諸霊を込めた八重桜でして、毎年見事に咲くようになり、4月の満開の時期にはこれら団体にも案内しているところです。今日の資料の1ページ目の写真がその八重桜です。

また、今後は引揚者からの証言などについてデータベース化するとともに、調査研究した内容を情報発信して、もう一度来館していただくことも考えていかねばならないと思っています。今後とも、「引き揚げのまち・舞鶴」のイメージを機軸に、本市をはじめ、近隣市町の小・中・高等学校での歴史の学習や平和の命の大切さを伝える学習施設として、

また、観光施設として利用されますよう、旅行会社にも広く情報提供を行って、集客の拡大を図っていきたいと考えています。

最後に、若い世代へ訴えかけるための取組です。引揚者が第一歩を記した栈橋、あるいは引揚援護局がありました平地区、この地区は大浦小学校という学校の校区ですが、その大浦小学校の6年生が、平成17年に引揚げについて学ぶ姿を描いたドキュメントDVD「2005年 私たちの船旅～引き揚げ・過去から未来へ～」というDVDを平成17年に学校が中心になって作成しました。このDVDは市内小学校、中学校、高等学校に配布するとともに、引揚記念館での貸出し、あるいは学校へ出向いての出前講座も現在精力的にNPO舞鶴・引揚語りの会に行っていたいておりますので、その講座の際にも冒頭に使用しているところです。

また、NPO法人舞鶴・引揚語りの会では、昨年度、子どもフォーラムを開催し、30名もの子どもが参加し、平和の尊さ、命の大切さを学んでいます。舞鶴市では今後ともこの事業に対し、継続して取り組んでいただくための支援をしていくこととしています。

本年9月6日・7日に実施いたします引揚最終船入港50周年・引揚記念館開館20周年記念事業において、いま一度平和の尊さ、平和の祈りを発信し、全国へ、そして次世代へその輪を広げる機会として、50年の時を超え、再出発の地、舞鶴から伝えたいメッセージをテーマとしまして、平和祈念事業特別基金主催の「平和祈念フォーラム2008」の開催には、子どもたちがスタッフとなりまして、受付等を担当していただくこととしており、さらにはこの記念事業では、子どもたちからのメッセージを発信していくこととしています。冒頭にも申し上げましたが、平和のシンボルとして開館しました舞鶴引揚記念館は、戦争を知らない世代への移行とともに、引揚げの事実は過去の出来事として遠ざかりつつあります。しかし、戦争の苦しみと悲しみ、平和の尊さを忘れてはなりません。これからも舞鶴引揚記念館は、国内はもとより全世界へ、平和の尊さ、平和の祈りのメッセージを発信し続けてまいりたいと考えています。

**【亀井座長】** ありがとうございます。

中田様事務局長からは何か追加をいただくことはありますか。

**【NPO法人舞鶴・引揚語りの会中田副理事長兼事務局長】** 私どもは館のハードの部分の補いとしてソフトの部分、一人一人の来館していただいた方に何らかの形で御説明ができるように、来館された皆さん、思いが違いますので、その方、その方に合った説明ができるよう一人一人お声かけしながら、御案内しております。

【亀井座長】 ありがとうございます。

それでは、引き続きまして、姫路市平和資料館について、福井館長から御説明をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

【姫路市平和資料館福井館長】 まず慰霊塔の話を先にする必要があるかと思います。戦後、昭和20年以降、戦災復興事業都市として国の指定を受けた全国113の自治体が加盟する全国戦災都市連盟というのがありました。その戦災都市連盟が、昭和27年以降、まちの復興と同時に、空襲で亡くなれた方々を慰霊する慰霊塔をどこかにつくろうということで、本連盟発祥の地であり本部の所在地である姫路市に「太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔」という慰霊塔を、標高50メートルほどの手柄山という山の山頂に高さ約27メートルの塔を建立しています。

その後、この塔を中心に平和都市姫路ということで色々な事業に取り組んでまいりました。その中で昭和50年ごろからこの慰霊塔が単にモニュメントではなく、平和を子どもたちに伝える何かが必要ではないかという話がずっとありました。そして、戦後50年を機に、平成8年にその慰霊塔のすぐ横に、今の姫路市平和資料館を建設したものです。

この慰霊塔の形は、塔身が、刀を大地に突き刺して、もう二度と戦争はしないという不戦の誓いを表しております。そのメッセージを具体的に伝え残すものとして、この平和資料館を市で建設したもので、今年で開館13年目になります。

資料館の理念そのものは、すなわち慰霊塔の理念でもあるわけです。戦争の惨禍と平和の尊さを後世に伝える平和な社会の発展に寄与するということを目的に、基本的には、空襲による被害を中心に、当時の市民生活などを展示しています。

施設の概要としては、1階が常設展示になっています。「美しいまち・姫路」、それから「炎の中の姫路城」、「覆われた姫路城」というコーナー別に、主として姫路の戦前、戦中、それから空襲の時期、戦後というコーナーを紹介しながら、空襲はどういったものであったのかということを経オラマや展示、あるいは多くの方々から御寄附いただいた現物資料を展示しています。そして、「炎の中の姫路城」のコーナーでは、音と光、それから床の振動と映像を使った空襲の疑似体験という形で見ていただくようになっています。2階は、年4回のペースで特別展や企画展を開催してまして、春と秋は何らかのテーマで、平成19年度でしたら、「子どもたちが記録した日常」と、それから「学びを奪った戦争」というテーマで展示いたしました。

平成20年度の春は、学童疎開について展示しています。それから夏は、7月、8月が

広島、長崎からお借りした資料を展示する「非核平和展」。そして冬、1月、2月、3月は、この館をつくるに当たって非常にたくさんの現物資料等を御寄贈いただいていますので、それを順次、何らかのテーマを絞りながら御紹介していくという収蔵品展を開催しています。

そのほか、館の活動としては、その間に、年に何回か姫路空襲を中心に、空襲や原爆を体験された方の体験談を聞く会を開催し、そしてそれと同時に、これを映像記録として残して、DVD等で市民の方、あるいは学校等で活用していただくようにしています。そのほか、俳優によります空襲体験記の朗読会、あるいはこちらから出かけて行って空襲体験談を語っていただいて、それをビデオとして記録し保存すると同時に、それを多くの方に見ていただくという活動も行っています。

収蔵する資料は、ほとんどと言っていいぐらい、館の開設以来、現在までに、市民を始め多くの方からいただいた品物です。現在、現物資料としては6,600点余り、それから写真や図書、あるいはテープ等を含め、一部未整理の物も含めまして、約1万点の収蔵資料があります。

この展示に関して、来られた方に、常時、説明員やボランティアがいて説明できる状態ではないのですが、団体については職員が対応して御紹介しています。

それからデータベースですが、現在、開館時から一つ一つの資料について写真を撮り、それを張りつけた台帳を作成し、その後、パソコンによるリストを作成するところまではしているのですが、それ以上のデジタルアーカイブス等の整理、あるいはそれをホームページで紹介し検索できるまでには至っていません。当館のホームページでは企画展や行事の案内ですとか、常設展示の様子を写真や動画等で紹介していますが、データベースの検索なり収蔵品の具体的な紹介ということには至っていません。

市がつくったという性格もありますので、対象は、もちろん市民全体なのですが、特に大きなターゲットとして学校の児童、生徒を考えています。学校の平和教育の場所として、これを活用してもらうのが、最も所期の目的に近いということもあり、学校にとにかく来ていただきたいというのが今の私どもの思いです。もちろんイベント等を通じて、家族連れなどの多くの方に来ていただいています。

若い人へのアピールについてでございますが、先ほども申しましたように、平和資料館は慰霊塔と一体ものとして考えています。この慰霊塔を中心としたエリアを平和発信のエリアという認識でいます。ですから、毎年若い人にこの空間を使ってほしいという形で、

資料館としてではなく姫路市として、そういったことを働きかけ、毎年、若い人たちの手でイベントを開催しています。又、今年の10月には樫本大進氏をお迎えして、慰霊塔の前で姫路国際音楽祭を開催することになっておりまして、これもその活動の一つです。慰霊塔、そして平和資料館を、できるだけ若い人へアピールするということで、こういった活動も行っています。

学校へのアピールとして、ある小学校6年生の社会の教科書では、太平洋戦争のところで、一般論として平和資料館を見学しようという記述がありまして、私どもの館の展示を掲載していただいています。これは全国の小学校で使っている教科書です。その他さまざまな形でアピールはしているのですが、資料の整理を今後どうしていくかというような課題もたくさんありますし、更により多くの人に来ていただくにはどうしたらいいかという問題点もたくさん抱えています。今後、一つ一つ皆様方の御意見を承りながら考えてまいりたいと思います。

**【亀井座長】** ありがとうございます。

それでは、次に、浦頭引揚記念資料館について、井手佐世保市市民生活部次長から御説明いただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

**【井手佐世保市市民生活部次長】** まず、設置目的です。太平洋戦争終結に伴い海外から本市浦頭に引き揚げられた方々の足跡を郷土の歴史的遺産として後世に伝え、恒久平和を祈念するため、同地に浦頭引揚記念資料館を設置するという条例になっています。

佐世保の浦頭については、昭和20年10月から昭和25年4月まで、4年半にわたって約140万人の方々が引き揚げられてきたという経過があります。これは博多港と並んで一番引揚者数が多い港でして、その140万人の内訳としては、特徴的なところは、一般邦人の方々が約76万人で、54%占めていたということです。陸軍が61万3,000人で43%、海軍が2万4,000人ということで1.7%という引揚げの状況であったと聞いています。

それから、浦頭に引き揚げて来られた方の検疫所がありました。この検疫所が終戦後25年4月で引揚げが終わったのですが、それから30数年たちましてこの検疫所が解体されることに伴いまして、引揚者の方、あるいは市民の多くの方から検疫所の跡に何か記念として残してほしいという声が上がったことから、こういった平和公園、資料館を建設するに至ったという経過があります。これを建設するに当たり、行政だけでなく市民の方の募金ということも含めまして、建設をしたところです。

佐世保の浦頭については、こぢんまりとした資料館です。全体が約165平方メートルということで、常設展示はそのうち約70平方メートルということです。

館の事業概要ですが、資料展示の主なものとして、全国の引揚者の方から寄せられました寄贈品を展示していきまして、資料館の管理は地元の観光協会に委託をしています。資料館に常駐します管理人は展示の説明も行っており、来館者の方に引揚げ当時の様子などを説明しております。

具体的な展示物ですが、パネルの展示、引揚経路模型、検疫所時代に使用していましたが消毒器具、引揚げ当時の着衣、日記、リュックサック、引揚証明書、当時の通貨などを展示しています。数としては非常に少なく、今のところ305点という展示の内容になっています。資料の収集方法については、市民の方、これは全国に呼びかけたということですが、寄贈によるものです。

運営上の工夫のところですが、先ほど言いましたように、管理委託しています。3の方が毎日交代で常駐されていますが、そういった方も非常に高齢化していきまして、平均年齢が70歳ぐらいということになっていきまして、後の方を探すのに非常に苦慮する状況もあります。

それから、来館者を増やすための取組ということですが、パンフレットを観光案内所等に置きまして、啓発に努めているところです。平成10年2月には「引揚港・佐世保を偲ぶ全国の集い」を開催し、全国から約5,000人の方に来ていただきました。

それから、若い世代へ訴えかける取組ということですが、佐世保市内の中学校1年生を対象に、中学校は26校ありますが、佐世保市の歴史遺産を見学や調査等の体験的な学習を通して、具体的に理解する「ふるさと歴史発見事業」を平成15年度から行っていきまして、毎年度4つないし5つの中学校の生徒さんに来ていただいて、資料館の見学をしていただいています。

昭和56年5月に検疫所を解体しまして、資料館の建設ということに至ったわけですが、この近くの南のほうに3.5キロから4キロ、時間にしますと車で10分程度ですが、太平洋戦争開戦のときの真珠湾攻撃の暗号、「ニイタカヤマノボレ」という暗号を発信した高さが約140メートルの無線塔が3本あります。そういったところもあわせて、引揚げと戦争の恐ろしさを皆さんに訴えかけることも展開していきたくと思っています。

**【亀井座長】** ただいま5館から貴重なお話、御説明を伺わせていただきました。ありがとうございました。

委員の皆様、何か御質問、あるいは御意見でも結構ですが、いかがですか。

【田久保構成員】 無線塔は西船橋の海軍から発信したのですが、あの塔が今長崎に、持っていかれたわけですか。

【井手佐世保市市民生活部次長】 そういう意味ではなく、説としては、針尾無線塔から出たという説があるようです。

【田久保構成員】 皆様方の御説明の中で、簡単に1日平均の入館者の数がおわかりになれば、お教えいただければと思います。大体的見当で結構です。

【昭和館小林事務局長】 平成19年度、年間ですが、累計で31万5,000名の方においでいただいたということです。

【しょうけい館石田事務局長】 しょうけい館は、平成18年3月に開館したところで、18年度が2万5,000人、それから19年度が2万6,000人ということで、トータル5万1,000人となっています。

【舞鶴引揚記念館宮本館長】 先ほども19年度で約12万人という説明をしましたが、正確に申し上げますと11万9,490人でございます。1日平均しますと332人です。

【姫路市平和資料館福井館長】 姫路市平和資料館は、現在年間2万人程度になります。ただ、平成8年度の開館から19年度まで見ますと、平成12年度と平成17年度が膨らんで、あとは引っ込むというパターンとなっています。戦後50年、55年、60年という節目の年に増えて、それ以降また少しずつ減るというパターンがあり、どうしてもマスキの影響が大きいかと思えます。

【杉浦座長代理】 8月になると、戦争関連の記事が多くなりますね。

【田久保構成員】 そういことですね。

【井手佐世保市市民生活部次長】 浦頭は昭和61年5月に開館していますが、一番多いときで6万人ぐらいの入館者があったということですが、19年度ですと1万6,845人、1日平均しますと53人という数になっていて、これまで大体2万人から1万5千人が入館者で、1日平均しますと、50人から60人ぐらいの入館者ということになっています。

【亀井座長】 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

【加藤構成員】 大変皆さん相当の御努力、御工夫を重ねておられるという、大変楽しかったです。それで確認なのですが、入館料を有料とされている館、無料とされている館それぞれありますが、その理由を教えてくださいませんか。

【昭和館小林事務局長】 運営する側の者としては御説明できないところがありますが、設置した段階でそのような設定にしたということだと思います。入館料大人300円ですので、他の博物館等と比べますと非常に安いわけですが、来館者にも一部負担ということを求めたのではなかろうかと思えます。詳細については、ちょっと私どもは承知しておりません。

【しょうけい館石田事務局長】 しょうけい館ですけれども、経緯の詳細は把握できていないのですが、結果的に無料で来館していただくということで、設置の際そういうことになったのだらうと思っています。

【舞鶴引揚記念館宮本館長】 難しいお尋ねなのですが、基本的に管理運営する以上はランニングコスト等々人件費も含めてかかりますので、それなりの受益者負担をしていただくというのが一つのスタンスです。あわせて、一つには、観光施設ということになっておりますので、おのずとそういったことになっていくかと思えます。一方で、先ほども申し上げましたように、学習の施設ともなっていますので、学生については半額にしているとか、そういう手だてはしています。開館当初は、舞鶴市の場合無料でして、平成6年に、開館から6年ほどたった段階に初めて有料化したのですが、あまりにもたくさん来館者が来られるということになってきましたので、やはり人も置かなければならないということになったという経過があると思えます。

【姫路市平和資料館福井館長】 姫路市の場合は、基本的には美術館などと趣を異にしまして、受益者負担という概念は必ずしも優先されておらず、開館時の議論の中では無料でもいいのではないかという意見も多くあったようです。ただ、どうしてもこういう施設の入場料は無料にすると管理上の新たな問題が生じてきますので有料にしたということだと聞いています。ですから、私ども、通常とは逆なのですが、常設展が有料200円いただいております、企画展は無料で入っていただくようになっています。

【井手佐世保市市民生活部次長】 開館当時から無料ということになっていると思うのですが、なぜ無料になったのか、はっきり確認はしていません。ただ、場所的にも市の中心部分から離れていますし、有料ということになれば、なかなか入館者も来ないというのが一般的な考え方かと思っています。

【亀井座長】 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

企画展等を開催する場合には、内部で学芸員の方がおられて、色々御準備になると思うのですが、先ほど御説明の中に語り部については人数をお示しいただいたり、あるいはN

PO法人という形で組織をされているというお話がありましたが、そうした方を除いた実際の館の企画等の管理運営に当たられるスタッフの方というのは何人ぐらいおられるのか、お聞かせいただけますか。

【昭和館小林事務局長】 昭和館の場合は、説明員等を含め館長以下職員31名います。

【しょうけい館石田事務局長】 しょうけい館は館長含めて13人でそのうち学芸員が4人、図書館司書が1人です。

【舞鶴引揚記念館宮本館長】 館長以下12人です。そして、語りの会が43人です。企画展等をする場合、社会教育施設に位置付けていますので、社会教育課との協議、あるいは語りの会との協議ということになっています。

【姫路市平和資料館福井館長】 館長以下、市の職員が、いったん退職しました再任用職員を含め6人いるだけでして、学芸員の配置はありません。

【井手佐世保市市民生活部次長】 浦頭は、先ほど説明しましたように、地元の観光協会に委託しているところでして、その中で、3人の方に毎日交代で来ていただいて御説明願っているということですから、企画展の開催であるとか、そういうところでの学芸員の配置というのは行っていません。

【亀井座長】 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

【杉浦座長代理】 概算、細かいのは必要ありませんが、年間の必要経費がどのくらいですか。

【昭和館小林事務局長】 昭和館の場合は国庫ですので、年間経費で委託費として5億4,000万円交付されております。

【しょうけい館石田事務局長】 1億9,000万円が委託費ということで交付されていまして、3階建てのビルを借りていまして、その半分ぐらいが賃貸料と、残り半分で人件費や事業費等を捻出しているということです。

【舞鶴引揚記念館宮本館長】 私の身分は文化事業団の職員でして、指定管理者制度をもって舞鶴市の文化事業団が請け負っているという施設です。人件費と管理費、光熱水費含めて17年度ベースで3,100万円です。これまでも大体平均しますと3,500万円ほどです。ただ、今、私ども非常に安く上がっているのは、自前でやっていますし、自前の公園ですし、そういった中に建設されているという施設です。

【姫路市平和資料館福井館長】 姫路市の場合は、市の一般会計の中で運営しており約2,700万円ですが、これは人件費を含んでいません。

【井手佐世保市市民生活部次長】 資料館は佐世保市で所管していますが、その委託料は年間約320万円です。周辺を公園という位置付けにしていますので、公園関係の維持管理ということで160万円程度ということで委託料として支出しています。

【杉浦座長代理】 結構みんな努力されているから安いという印象です。

【亀井座長】 ほかにいかがですか。よろしいですか。

どうも本日は、5館の皆様、御出席をいただきまして、本当にありがとうございました。遠路、お忙しい中、本当に申しわけありません。貴重なお話、ありがとうございました。これから休憩に入らせていただきたいと思います。

( 休 憩 )

【亀井座長】 引き続き、内外の関連資料館についての説明を事務局からお願いします。

【米澤特別基金事業推進室長】 今までは実際にその館に携わっておられる方から御説明いただきましたが、これからは、ほとんどその資料館を見たことのない者が見てきたように話しますので、雑ばくな話になり一部不正確な点があるかもしれませんが、よろしくをお願いします。

今回、全体で14の資料館を御紹介します。これは現在、平和基金が資料館会議などを通じ連携しています、国内の14資料館を取り上げています。概要を申しますと、地方公共団体がいずれも設置していますが、ベースとしては、地域の空襲、戦時下の県や市町の住民の方の生活が取り上げられています。それに加えて、その当時の戦争の背景、現代の戦争、紛争に至るまで、また国際協力、人権、環境というものも取り上げているところもあります。

それから、そういったもの以外では、例えば樺太関係資料館や、それから特攻について取り上げました知覧特攻平和会館といったものもあります。先ほど御紹介いただきました5館を除き9館について、この資料4に沿って御紹介します。資料4は、あくまで事務局の文責で作成したものですので、そういう意味で未定稿という位置付けになりますので、御理解いただきたいと思います。

まず、北海道が設置しています樺太関係資料館です。場所としては、札幌市にある北海道庁の赤レンガの旧庁舎の中に、これは比較的新しくて、平成16年8月に設置されているようです。もともと北海道と樺太は古くから交流がありましたので、そういった歴史の

遺産や、文化的な遺産ということも含めていますが、特に戦争の関係ですと、樺太は昭和20年8月のソ連の参戦に伴いまして、実際にこの現地が戦場になっていますので、戦場となって多くの方々が犠牲になったということと、それから樺太からも北海道や本土のほうにかなりたくさんの方々が引き揚げて来られていますので、そういった引揚げに関する実物資料などがこの館で紹介されているというものです。

次に、仙台市戦災復興記念館です。これは名前が表すとおり、戦災と復興ということまでをテーマとして扱っています。芭蕉の辻というのは仙台の繁華街、市街地の中心のところのようですけれども、仙台の昔の昭和初期の町並みとして、戦前の様子を表す展示と、20年7月10日の空襲によって受けた被害と、戦後の復興の経過までを取り上げているのがこの館の特徴ではないかと思っています。

引き続きまして、埼玉県の平和資料館です。この館も同じように、県民生活と戦争とのかかわりを歴史の推移の中で理解できるようにしようということで、特にこの館の特徴的なものなのかと思われるのが、戦時中のある1日を疑似体験しようというジオラマがあるようです。戦時中のある1日の疑似体験として、パンフレットを見る限りですと、修身の授業をしているところで空襲警報が鳴りまして、防空壕に避難をしたところ、光と振動が始まって空襲を疑似体験するということです。私も見ていませんので、具体的にどのような仕組みになっているのかわかりませんが、そういったものが特徴的な展示のようです。

それから、次に川崎市平和館です。これは川崎市が設置してまして、この館も同じように、昭和20年4月15日の川崎大空襲を取り上げて、あわせて、満州事変から終戦に至るまでの戦争がどのようにして起こったのか、アジア諸国にとってどのような意味を持つのか、それから戦争の歴史ということで人類全体がかかわってきた戦争について考え、提示するという展示内容になっているようです。

それから引き続きまして、神奈川県が設置している地球市民かながわプラザです。神奈川県の大空襲の様子、これは横浜、先ほど申しあげました川崎、それから平塚、小田原といった比較的大きな都市でもって空襲に遭っていますので、そういった空襲の被害の様子や、それから先の大戦が世界に与えた苦痛がどうであったか、あるいは戦後の冷戦、冷戦後の戦争や紛争、こういったものについても取り上げているようでして、あわせて神奈川県内のNGO活動にも言及しているという館のようです。

それから、次に大阪国際平和センターです。大阪府と大阪市が共同で設置しているようでして、実際の運営は財団法人大阪国際平和センターというところが運営しているようで

す。大阪も東京と同じように非常に大きな空襲を受けていまして、パンフレットによりますと50回に及ぶ空襲を受けているということですので、その実態を明らかにしていこうということで、戦時下の民衆の生活が再現されています。

また、防空壕の模型があったりですとか、あるいは繁華街が焼け跡になったジオラマですとか、油脂焼夷弾というものの実物展示や、複製の1トン爆弾など、非常にわかりやすい資料展示になっていると思います。

それから次の堺市立平和人権資料館です。平和、人権、それから環境ということも取り上げておられるようでした、この3つのテーマに応じてそれぞれゾーンが設けられており、その中で特に平和ゾーンということでは、堺も大きな空襲があったようですので、堺大空襲が追体験できる展示があるようです。それから、これも本物の模型だと思いますけれども、被災した三輪車といったような実物資料なども若干展示があるということのようです。

それから知覧特攻平和会館です。南九州市に合併になっていますが、かつての旧知覧町という町が設置したものです。特攻隊員の慰霊をすることと、特攻隊員の姿、遺品、記録を後世に伝えていこうという趣旨、目的のものです。

展示内容としては、このパンフレットにありますのが戦闘機の模型です。これは陸軍の「飛燕」「疾風」という戦闘機です。それからパンフレットに実物のさびた零戦が掲載されています。これは鹿児島で水没していたものを昭和55年に引き揚げたものです。

陸軍の「隼」という戦闘機が、これは映画のために復元をしたものですが、ここに置いてあるようです。以上のように実物や大型の模型の戦闘機が展示してあります。それからこの特徴としては、特攻隊員の方々に慰霊し、その姿を後世に伝えることが一つの趣旨になっています。資料館には特攻隊の方々の遺影があります。パンフレットには1,036柱とありますが、それぞれ故人の方の遺影と出撃した月日等がそれぞれ書かれたものがあります。また、特攻隊の方の出撃前のスナップ写真ですとか、飛行帽、飛行時計、家族にあてた遺書など、そういった実物の資料が置かれています。

次に、沖縄県の平和祈念資料館です。これは沖縄県が設置してまして、糸満市にあります。摩文仁の丘に「平和の礎」という沖縄戦で亡くなった方々を慰霊するための碑がそれぞれありますが、その丘の一角に建っています。この特徴としては、沖縄戦の歴史的教訓を正しく後世に伝えていくということですので、特に沖縄戦の実態を明らかにするというものです。パンフレットによりますと、資料館では、「沖縄戦への道」、それから「鉄の爆風」ということで、これは特に沖縄戦全体の戦闘経緯を大型モニターで絵を映し出して

いるようです。それから破壊された民家や建物などが再現されていたり、非常に生々しいものとして、「地獄の戦場」として、沖縄でガマと言われている自然洞窟、この中に住民の方々が逃げ込んで、兵隊もこの中に立てこもって抗戦していたということですが、そのガマの中の様子や一つの証言を大きなパネルに写し取って、来館者が読めるような工夫をされているなど、そういうことが展示の特徴となっています。

国内の関係資料館については以上を御紹介しました。

それから続きまして、海外の関係資料館もあわせて御紹介します。

海外の主なものとして、特に国として取り上げましたのは、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ポーランド、ロシア、中国、韓国の8カ国でして、先の大戦での主要な参戦国の代表的なところと思われる国を取り上げています。

まず、イギリスの帝国戦争博物館です。ここでは、第一次世界大戦以降のイギリスと英国領、今でいうと英連邦がかかわってきた戦争や紛争を全般的に取り上げておられます。ロンドン市内の公園の中にあり、外観は非常に立派な建物になっていて、19世紀初頭の病院の建物を使っているようです。ここに大砲が2基据えていて、戦争博物館という様相、雰囲気を出しています。

館内の様子については展示ギャラリーのようなところがありまして、これが吹き抜けになっていて、相当天井の高い空間になっているようです。これが中心にありまして、第一次世界大戦当時の兵器が設置されています。例えば戦車のようなものや第二次世界大戦のときのものと思われる大砲ですとか、装甲車のようなものとか、それから飛行機がつるされています。また、イギリスの第一次大戦のときの複葉機やおそらく第二次大戦のものだと思われませんが、ドイツの飛行機もあります。もちろんイギリスの第二次大戦のスピットファイヤーか何かもここにつるされているようです。

わりと老若男女、特に家族連れが多く来られているということです。それから、中央の吹き抜けの展示室を中心に、ぐるりと展示室が配置されているようでありまして、それぞれ第一次大戦のコーナー、第二次大戦のコーナーというコーナーごとに展示室が置かれています。例えば、展示の様相としては、軍服ですとか、兵器などを展示しています。それから、爆撃機の内部で兵士が働いている姿を描いた絵画なども展示しています。爆撃機の上のほうに操縦士がいて、通信兵がいて、測量というのでしょうか、航法要員というのでしょうか、そういったような人がいます。また、ロンドン大空襲のときの被害のようなものをジオラマで作ったものがあります。

例えば女性に兵器増産のために工場に来てくださいというようなことを呼びかけるポスターですとか、それから自分の恋人である兵隊に送った手紙が行ったときにはもう亡くなって、開封されないで表面に killed と書いて戻ってきたというようなものなど国民生活にわたっても展示されています。

それから、この館の特徴として、ユダヤ人大虐殺についても、このための展示室を個別に設けているようです。常設展示室だけでも7,800平方メートルで、平和基金の約10倍の規模となっています。

次に、アメリカです。アメリカには非常に有名なスミソニアン研究所というもののもとにアメリカ歴史博物館がありますけれども、今回特に取り上げたのはそこではなくて、アメリカ第二次大戦博物館を取り上げました。これは南部のニューオーリンズにありますが、規模が1,500平方メートルということで、目的も第二次大戦の勝利に貢献した人々の勇気と犠牲をたたえ、後世に継承していこうということで、歴史全体というよりも、人に特化したような印象があります。

特に第二次大戦ということに特化した国立という位置付けの資料館となっています。どういう経緯でつくられたのかというと、ノルマンディー上陸作戦についてのベストセラーを書いたアンブローズさんという方がおられて、その方が退役軍人の方々にいろいろインタビューをする過程で、当時いろいろな記念品をもらったことが当初の発想だったということと、それからニューオーリンズにノルマンディー上陸作戦のときに使いました上陸用舟艇がここでつくられていたようでして、アイゼンハワーがこの上陸用舟艇がなければノルマンディーは成功しなかっただろうというようなことも言われていたようです。そんなことがきっかけで、アンブローズさんがアイゼンハワーにインタビューしたこともきっかけになって、この博物館ができています。

資料4に国立と書いていますけれども、もともとが全く民間の方の発意でつくられたものでして、運営も民間団体です。ただ、2003年に、アメリカの連邦議会からナショナルという位置付けを与えられ、そういった名称を使ってもいいとして、連邦予算も認められているようでして、これはアメリカ独特の制度や仕組みが何かあるのかもしれませんが、基本は民間団体の方が運営されているというものです。ここにどんなものがあるかということ、大型の兵器としては爆撃機のレプリカのようなものですか、また、ポスターや新聞記事が張られているようです。

それから、ノルマンディー関係の資料などもあり、展示装置は充実しているような印象

です。

それから太平洋戦争についてもかなりのスペースは割いているようでして、太平洋戦線に関する写真、地図、パネルなどが展示されています。それから太平洋戦線での海兵隊の写真ですとか兵士の労苦を示したものや、また日本軍についても、軍旗、当時の戦利品だと思いますが、日本軍の軍服とか、小銃や機関銃のようなものが展示されています。兵士という視点がかかなり強いという印象を受けています。

それから次のフランスには、レジスタンス解放博物館があります。これも国が運営しているものですが、展示面積は450平方メートルと比較的小ぶりです。主なものとして、レジスタンス関係のビラ、ポスター、それから独特なものとして、レジスタンス活動のために身分証を偽造するためにこんな道具を使いましたとか、それからレジスタンスが使った無線機、それから処刑されたレジスタンスがつながれていた牢獄の板壁が展示してありまして、そこに自分の名前が書いてあります。そのようなものが特徴になっているようです。

それから次にドイツです。ドイツにはホロコースト関係の博物館というのはいくつか各地方にあるようですが、ドイツ軍のかかわった戦争に関する博物館、戦争に特化したものはみつけることができませんでした。これから御紹介するのは、ドイツ歴史博物館です。これはドイツの紀元前ぐらいからの歴史全体を取り扱ったものです。戦争関係のものとしては、例えばドイツ軍の軍服ですとか、それから写真としては、ソ連に降伏文書に調印するところすとか、それからニュールンベルク裁判の様子すとか、そういうものが展示されているようです。展示面積は、全体が1万平方メートルということで広いですが、第二次世界大戦部分はその一部ということになります。

それから次にポーランドです。ポーランドのアウシュビッツの収容所を取り上げています。有名なものですので、ご覧になられた方もいるかもしれませんが、もともとアウシュビッツ・ビルケナウ博物館という名称でして、ポーランドのクラクフという古都がありますが、そこから約70キロぐらいにあるオシフィエンチムという市につくられたそうです。このオシフィエンチム市は、ナチスのときにアウシュビッツというようにドイツ風に改称されて、ここにアウシュビッツ第一収容所というのがあり、そこから大体5キロぐらい離れたブジェジンカ村というところにアウシュビッツ第二号収容所、ビルケナウという収容所がつくられたそうです。実はもう一つ、アウシュビッツ第三号収容所というのがつくられたのですが、そこはどうも破壊されて、今は建物が残っていないようです。

そうすることで、ソ連軍が攻めてきた過程で、多くのバラックなどが破壊されたようですけれども、収容所の一部の建物が当時のまま残っておりまして、その内部の見学が可能だということになっています。非常に大きな敷地がありまして、第一収容所と第二収容所、あわせて200ヘクタールぐらいあるそうです。1979年には、皆さんご存じのように、ユネスコの世界文化遺産にも登録されています。有名な門のところには「働けば自由になる」と書いてあるらしいのですが、そういう非常に皮肉なプレートを掲げて、この下を収容者が通って行ったということです。

それからビルケナウ収容所の方だと思いますが、収容所への鉄道の引き込み線が当時のまま残っております。それから中の展示品の例ですけれども、側面と正面からそれぞれ撮った収容者の写真や収容者の衣服の写真が展示してあります。それから収容された方の毛髪を使ってカーペットのたぐいとか、生地をつくったりしたようですが、そういったものもあわせて展示がされています。こういったもののほかに、当時の施設のガス室とか、処刑に使ったチクロンBという薬剤とか、絞首刑台などの施設も一部現存されているということです。

それから次のロシアについては、資料館名は大祖国戦争中央博物館で、これも皆さんご存じのとおり、ソ連やロシアにおいて、ドイツの侵略を食いとめた戦争を大祖国戦争と称してしまっていて、その大祖国戦争の知識普及を図ろうということと、歴史的資料を収集していこうということです。

展示内容としては、写真や地図、当時の公文書や兵器、それから勲章などですけれども、特徴的なのは、6つの戦場が主要な戦場ということで、そこのジオラマを設置しているようです。例えばモスクワの攻防戦とか、それからスターリングラードやレニングラード、ベルリン侵攻のときのジオラマなど、6つの戦場のジオラマが置かれています。それから展示ホールとは別に、ソ連邦の英雄をたたえるホール、それから犠牲者を追悼するホールといったようなものも設置されているようです。それから野外には戦車や航空機などの大型展示もあるようです。

次に中国についてです。北京の盧溝橋に中国人民抗日戦争記念館があり、約6,700平方メートルと相当大規模になってしまっていて、満州事変から終戦に至るまでを時系列とテーマ別ということで、実物、写真、模型、それから油絵、銅像などが展示されています。

韓国については戦争記念館を調べましたが、これは韓国の歴史全体の中における韓民族の国を守る戦争についてのものとして、相当数の先史時代からの昔の戦争から現代の朝

鮮戦争や、韓国も出兵したベトナム戦争に至るまでの資料が展示してあります。

説明は以上です。

【亀井座長】 随分幅広く、いろいろと関連資料館の御説明をいただきました。ありがとうございます。

何か御質問等ありましたら、お示しいただければと思います。いかがでしょうか。

【杉浦座長代理】 中身の議論ではありませんけれども、我が国で考えるときに、今回御説明いただいた諸外国の国立で大規模なものをここで議論するような中身になるのでしょうか。

【米澤特別基金事業推進室長】 私どもとしてもそこは非常に悩ましくて、国として戦争博物館をつくろうというのはイギリスでは非常に古くて、第一次大戦の戦争中からそういうものをつくっていますし、旧ソ連も、これは比較的最近なのですが、戦争が終わってすぐぐらいから国を挙げてつくろうという議論があり、やはり経緯が随分違うところがありますので、なかなか参考にしづらいという点はあると思います。ただ、一方で、今回いろいろ調べてみて、アメリカの第二次大戦博物館は、兵隊という視点がかなり入っているようでしたので、こういうところも参考になるようなものを幾つか見い出せばと思っています。

【田久保委員】 先ほどの御説明を伺って、外国の関連資料館のキーワードは戦争(War)が多い一方で、日本の関連資料館のキーワードは戦争で悲惨な目に遭ったことから(Peace)が多いという明確な違いがあると思いました。

【米澤特別基金事業推進室長】 やはり戦勝国は犠牲を悼むという側面もありますが、たたえるという側面も一方であると思います。

【田久保委員】 外国の関連資料館は平和のためにという目的以外に、自分たちの歴史を知りたいという関心があり、その点は日本と異なっていると思います。日本の方は平和というかなり抽象的な目的ですから、人を集めるには相当努力が要ると思いますね。だから日本で問題ないのは大和ミュージアムとか、知覧特攻隊平和会館で、これは行く人のインセンティブが違うように思います。そこのところが対照的に違うという気がしました。

【杉浦座長代理】 ポイントが一本に絞られていると展示も楽ですし、PRも楽です。次回以降になると思いますが、ここで何を中心に整理しようかという議論があると思います。だから今の外国にある国立のものを頭に置いた議論でいくと、多分、整理しにくいと思います。

【米澤特別基金事業推進室長】 それぞれお国柄によってそれぞれ事情があつて、それぞれの事情でいろいろなものがつくられているなということが今回わかればいいのかと思います。日本は日本のやり方で、事情に応じてということだろうと思います。

【戸高委員】 本当にそう思います。こういうものというのは、どういう姿勢でどういう考えでやっているかを本当に絞り込んではっきり出さないと、後から後から質問とか、いろいろ突っ込みが続くわけです。ですから、やはり聞かれたときに答えがぶれるようではいけないので、最初にきちんと練り込んでやっていけば、問題が逆にないので、その段階が一番神経と時間を使っていいという気がします。

【亀井座長】 ありがとうございます。ほかに何か御質問、御感想等ありませんでしょうか。

それでは、次回の検討会について、事務局から御説明をお願いいたします。

【米澤特別基金事業推進室長】 次回の検討会は、9月25日に開催させていただきますのでよろしくお願いいたします。

【亀井座長】 それでは、以上をもちまして、第3回平和祈念展示資料の記録・保存等に関する検討会を閉会させていただきたいと思います。ありがとうございました。